
"switch"#0

逢川みず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

” S w i t c h ” # 0

【Nコード】

N 0 2 6 2 G

【作者名】

逢川みず

【あらすじ】

とある猟奇殺人事件とともに、広まった言葉^{ワード} 『スイッチ』。詳細、実体ともに全て不明。天才変人少年とその幼馴染がその謎と陰謀に巻き込まれていく。第1章『孤島の島殺人事件』連載中。

ブローグ - "key word"

けだるい月曜日の朝、リビングで殺人事件のニュースが流れていた。

それは最近よくあるような身勝手に理解しやすい猟奇殺人のようだった。

まもなく容疑者が上がった。
十代の少年だった。

現場に残された物証や目撃情報から、『彼』が犯人に違いなかった。『彼』以外では在り得なかった。

しかしながら、『彼』は犯行を否認した。

世間は『彼』を愚かだと怒り、嘆き、いずれ自供するだろうと思っていた。が、その後程なくして、事件について一切の報道がされなくなったのである。ネット上での情報や追跡も徹底的にデリートされた。

こうして世間から閉ざされた事件は、いずれ忘れ去られた。

一方、悪魔的な報道規制と情報削除から逃れるように、あるひとつの言葉が都市伝説のように、はたまた呪いのように、流布することになる。

『スイッチ』

詳細一切不明。
謎。

そして、唯一の”Key word”(キーワード)

$$\begin{array}{r}
 > \\
 i \\
 2 \\
 7 \\
 2 \\
 \hline
 1 \\
 1 \\
 5 \\
 <
 \end{array}$$

第1章 孤島の島殺人事件 01・甲板風景

どきつ！ 豪華クルーザーに野郎が五人！！

……なんて、何のドキドキもトキメキもないシチュエーションである。

「礼欧^{れお}ー、ウツボ！ ウツボだよ！」

そして、船から上半身を乗り出して、嬉しそうに叫んでいる幼馴染の変人。

腐っても読み間違えはしないでほしい。『恋』人でなく『変』人である。こちら側に突き出している尻を後ろから蹴り上げて、この広い海へと放り出してやりたい……。ブラックな妄想を思い浮かべていると、かたわらの青年が口到手を当てて「ウツボ」と呻いた。「大丈夫ですか？」

「ええ……ウツボ、苦手なんです。というか、爬虫類と魚類、全般苦手。特にウツボは、蛇に似ていて邪悪な気がします」

「顔色悪いですね。休んでいた方が良いでしょう」

「ありがとうございます」

自分よりも三歳年上で、いかにも文学青年といった風で肌白い彼は、パラソルの下の椅子に座る。

高校二年の夏休み。

眼鏡越しに見上げる空は高く、海は青い。さらに、なかなかお目にかかることにできない豪華クルーザーに乗せてもらっているというのに、こんなにも浮かない気持ちになるのは何故だろう？

「あの、由宇^{ゆづみ}巳さん」

少しでも気を紛らすため、同じく浮かない表情の青年に声をかけてみた。

「由宇巳さんって、推理小説の作家さんなんですよ。どんな作品を描かれているんですか。デビュー作はまだ読ませていただいてないんですけど」

事前に知ったプロフィールによると、由宇巳コウは出版社の推理小説新人賞で大賞を取り、若干二十歳でデビューした現役大学生作家なのである。

「デビュー作は、叙述トリックを逆手にとった作品でした」

著作を読んでいないというのに気を悪くした風でもなく答えてくれる。

ちなみに、俺は小学校高学年以来、推理小説というものを読んでいない。

「じょじつトリック……？ すいませんそれって何ですか」

だからその辺の知識も、アガサ・クリスティーのポアロシリーズとか、金田一少年止まりなのだ。

「例えば、文中でいかにも男性のように描写されている人物が実は女性だった、とか。小説が文章だけで創り上げられるからこそ出来るトリックで、それが例えば絵や映像になってしまふと成立しなくなってしまう。大方はそんな感じのものです」

「はあ。つまり、挿絵が多いライトノベルなんかだと出来ないんでしょうか」

「登場人物がイラストにしていると、確かに成立しないですね。これはなかなか新鮮な発想だ。逆手にとって、何かできるかもしれないですね。おもしろい」

「そうすか……」

俺はちつとも面白くない。

「ねえ、礼欧、うつぼー！」

「いちいち報告しなくていいよ！ ちょっとは静かにしてるよ、聖」
「だあーって、海久しぶりなんだもん！」

由宇巳コウとは対照的に、日に焼けた健康的な肌色の幼馴染が元氣一杯にはしゃいでいる。視線は海に向けたまま。俺は知っている。あのTシャツと短パン姿の、短パンが海水パンツだということを。島に着いたらさっそく泳ぐつもりでいるらしい。

「うつぼ、うつつぼ」

かゝわゝいいゝなあ」

「妙な作り歌はやめろ！」

「彼、天才なんですってね」

由宇巳がぼそつと尋ねてきた。興味津々という風ではない、むしろ、ちよつと引いている感じだ。

「岩槻聖くん^{いわつき ひつぐ}。全国統一模試では、万年一位の天才少年。特に、科学の分野では大学で特殊教育も受けているんだそうですね。すごいなあ。もしかしてサヴァン症候群とか？」

サヴァン症候群。それは、ごく特定の分野に限って、常人には及びもつかない能力発揮する症状を持つ人たちのことである。しかし、一六歳にもなる男子が、鼻歌（ウツボの歌）を口ずさみながら、阿呆のように口を開けて海を眺めている姿は、いかにもイタイ系である。

「いくら全国模試でいつも一位だからって、サヴァン症候群だなんて大層なものじゃないですよ。そりゃ秀才には違いはないけど、テスト勉強だって人並みにしているし、一度聞いたら全てのことを記憶する天才とかってわけじゃない」

聖の担当医が言っていたことを思い出しながら説明を続ける。

「アイツが得意なのは、テストの山張りなんです。なんでも過去問を十年くらい遡って、出題傾向を分析してるらしいですよ」

「…へえ。そんなもののなの」

つまらなそうに由宇巳が呟いた。聖に向けていた視線が、今度はこちらに移る。

「じゃあ、君は？」

「…え？ 俺、ですか」

彼の質問を略さずに示すと、『君は何の資格があつて、招かれたゲストなのか』ということである。

由宇巳コウは最年少で大手出版社レッツの推理小説新人賞をとった天才学生作家。岩槻聖は同じくレッツ社の全国学力模試で万年一位の天才少年。どちらも確固たる実績がある。平凡な高校生が、大手出版社の無人島ツアーに招かれ、今、この場にいるには、理由が

いる。

そして、俺、宗方礼欧むなかたれおはというと

「岩槻の幼馴染…です」

「おさななじみ？」

由宇巳が不審げな表情をする。

空を見上げると、相変わらず一点の曇りもないスカイブルー、海はキレイなコバルトブルー。本当は、この夏はバイト三昧のはずだったのに、バイト先である大学研究棟の医者、千葉先生に聖の同行を命じられたのである。

「まあ、面倒を見るために同行を命じられたというか。あいつ、普段からあんな変人だから社会的に適応しにくいし、身体が弱くて、誰かが面倒みてやらなきゃならない危険人物なんです」

アウトドア嫌いの俺としては、何とも不本意な今回の同行である。まあ、もともと聖がお世話になっている病院の先生に紹介されたバイトだ。因果関係が全くないとは言えないが、それでも普段と時給が同じなのは納得できない。特別手当くらいは出してくれても良さそうなものだ。聖を溺愛している、あのケチでヒゲ親父の千葉め「礼欧ー、港が見えたよ！」

サヴァン症候群風の彼、岩槻聖が絶叫した。

クルーザーがほとんど島の港に近づいていく。もう逃げられない。こうして、俺は本土から5キロ程離れた無人島に強制的に送り込まれたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0262g/>

"switch"#0

2010年10月10日06時17分発行